

おそろい兄妹・3
くユマとエマく
(中)

(試読版)

承前 さくらんぼエプロンベードレス

(いや……いや……)

(いやあっ……！)

すっかり寒さも去り、花曇りの日々が続く四月下旬。

「いやあっ！」

郊外の高台を切り拓いてつくられた、住宅街。

その一角にある朝倉宅の二階に、舌足らずな少女の叫びが響き渡った。

広さ六畳ほどのその部屋は、壁も天井も明るいピンクで、床は一メートル四方のカラフルなマットが並べられている。全体的にパステル調の、明るい内装だ。

中心にはベビーベッドが二台並べて置かれている。それぞれの上には、馬や星の飾りをぶら下げたメリーサークル。クローゼットやキャビネットなどの家具も、角が丸く加工されたベビー用のもので、部屋の一角には五〇センチほどの高さの柵で囲われた空間——ベビーサークルがあり、そこにはぬいぐるみや知育玩具、積み木の類が置かれていた。

一見してわかる、ベビールーム。

その主である少女は、片方のベビーベッドのすぐ近くで、布おむつカバーを付けただけの半裸の姿で、憤懣を込めて母親を睨みつけていた。

「いやったら、いやなの！」

身長は八〇センチほど、目の前に座っている母親と、目線の高さは同じくらいだ。

絹糸のように細い髪を切りそろえたおかつぱ頭は、ヘアゴムを使って高いところを左右に括っついて、まんまるほっぺにくりくりとした目元、朱をさしたように赤い唇は、長ずればなかなかの美人になるだろうと思わせた。

腰を覆う布おむつカバーはピンクのギンガムチェック柄で、お尻側に縫い付けたタグには「あさくら えま」と名前が入っている。内側に何枚かおむつを当ててあるらしく、全体的にもっこりと膨らんでいた。

娘の駄々に、外見的には三〇くらいの母親は困ったようにため息をついた。

浮かせた手には、娘に着せようとした服がある。

ピンクの生地にはサクラの花柄がプリントされた長袖ロンパース。白い丸襟にも、ピンクの糸でサクラの花の刺繍があしらわれ、肩口はふんわりと膨らんで、袖口には白いカフスがついている。前側にならないでいる白いくるみボタンは飾りで、首筋とクロッチ部分にスナップボタンがついているベビー用のデザイン。前側はシンプルだったが、お尻側にはレースの付いた三段重ねのフリルが揺れていた。

それだけでも充分に可愛らしいロンパースだったが、母親が座っているすぐ横には、それとセットになるエプロンも置かれていた。

「えま」と書かれた胸当ての周りや肩紐に、たつぷりとフリルがついた純白のエプロン。ウエストはボタンで留めた上から、左右についている紐をリボン結びするようになっていて、その下は前掛けというより、大きなフリルスカートのような状態になっている。裾の左右には、五枚の花弁を持ったサクラのアップリケ。お尻側は開いているが、そこからロンパースのフリルが覗くデザインで、いわゆるエプロンドレス風のセットとなっていた。

「でもエマちゃん。そのままお外に出たら、風邪をひいちゃうわよ。お熱が出て、くしゅんくしゅんしたら大変でしょ？」

「いや！ だったら、外、でない！」

少女——朝倉絵麻は、いやいやと首を振る。

母親は小さくため息をついて、ロンパースを持った手を下ろした。

娘の絵麻は半年ほど前から、自我の発達に伴い大人の言うことに反発するようになる、いわゆる「いやいや期」に入っていた。

こうしていやいやしはじめると、とても大人の手に負えなくなる。無理に言うことをきかせたれば、我が子の成長に悪影響を及ぼしかねない——そんな心配もあるのだ。

「しようがないわね……そんなにいや？ じゃあ、エマちゃんはどうしたいの？」

「エマ——エマは、おにーたんと、おちよろいがいい！」

絵麻はそう言って、駄々をこねる。

兄の雄馬は、年の離れた一八歳。すでに高校を卒業しているが、受験に失敗して、今は浪人の身である。それでも絵麻にとって、父親が海外出張ばかりで不在がちな朝倉家では数少ない「大人のお兄ちゃん」であるらしく、兄と同じ扱いをねだるのである。

「じゃあ、しようがないわね——」

母親はそう言って、

「お兄ちゃんから先に、お着換えしましょっか」

さきほどから妹のすぐ横に座っている「お兄ちゃん」を見上げた。

「う、うん……」

震える声で答える一八歳の兄、朝倉雄馬。

彼は、妹と「おそろい」の格好をしていた。

身長一六〇センチ半ばほど、少年としては小柄で華奢な体に着ているのは、妹と同じ、ギンガムチェックの布おむつカバーのみ。色は水色で、こちらもお尻側のタグに「あさくらゆま」の名前が入っていた。

小柄とはいえ少年の体におむつカバー一枚だけというのはひどく滑稽だったが、名前の割にやや童顔で女顔の雄馬には、妙に似合っている。

もつとも、だからと言って本人はその格好に納得しているわけでも、まして喜んでいるわけでもなく――

(いや……いやだっ……!)

今にも泣きそうな顔を真っ赤に染めて、雄馬は奥歯をかみしめる。

(いくら絵麻に言うことをきかせるためだからって、何も、高校を卒業した男の俺を、赤ちゃん扱いすることはないじゃないか……!)

一八歳にもなって赤ちゃんのような――まして妹とおそろいの、少女のような姿をさせられる恥ずかしさは、いっそ殺してくれと言いたくなるほどであった。

もちろん彼が穿けるようなサイズの少女用おむつカバーが、市販されているわけではない。かつて女兒服ブランドでデザイナーをしていた母親が、わざわざ妹と「おそろい」で手作りしたものだっただけ。

しかも、決して形を真似ただけのものではない。尿漏れ防止のために太腿周りをびったりと覆う立体構造で、中には防水生地が挟み込まれている。その性質から通気性はないため、下腹部全体がびったりと覆われていると内側が蒸れ、熱がこもって仕方がなかった。

おむつカバーの中には、ちゃんと布おむつも当てていた。こちらわざわざ彼のサイズに仕立てた、一二〇センチの布おむつ。白いドビー織の生地に淡いピンクでハート柄をプリントしたもので、見えないところまでこだわって作られていた。

もつとも、そんなことは雄馬にとっては何の慰めにもならない――どころか、かえって恥ずかしさを増すばかりだった。

(なにも、おむつまで手作りしなくてもいいのに……)

お尻から会陰部、そして控えめなペニスを含んでいるのは、ドビー織のざらつく感触。五枚重ねで当てられているため、前も、お尻側も、もっこりと膨らんでいる。

(赤ちゃんみたいに、もっこりになっちゃってる……)

ベビー生活開始から、一週間。だいぶ慣れてきたとはいえ、一〇年近くトランクスに通気性に慣れてきた少年にとっては、つけているだけで「布おむつの感触」をまざまざと認識してしまう。

これだけでも少年を辱めるに十分な、「おそろい」の布おむつとおむつカバーだったが、用意されたのは、おむつカバーだけではない。妹が持っているものはほぼすべて、「おそろい」で作られていた。

ロンパースやワンピース、フリルブルマーなどの、ベビー服。

よだれかけや帽子などの小物。

そして色も柄もとりどりの布おむつカバーまで。

とうぜん、いま母親が絵麻に着せようとしているエプロンドレスも、おそろいのものかちやんと雄馬に用意されている。

母親のすぐ横に置かれた、ロンパースとフリルエプロンのセットがそれだった。色はパステルな水色で、絵麻の物よりも二回りほど大きく、こちらは襟の刺繍やロンパースの柄がサクランボ。こちらのエプロンの胸元には、大きく「ゆま」と書かれていた。

母親はそれを手に取って、

「じゃあ、お兄ちゃんがこのお洋服を着たら、エマちゃんも着てくれるわね？」

「う……うん」

母親に問われて、絵麻は何か騙されているような、曖昧な表情でうなずく。

「大人のように扱われたいからお兄ちゃんとおそろいになりたい」はずが、いつしか「お兄ちゃんとおそろいになれば大人のように扱われている」に主客転倒し、「お兄ちゃんを赤ちゃん扱いすることによって妹にベビー服を着せる」という逆転現象が起こっているのだが、それを理解するには絵麻の知能は未発達だった。

しかしもちろん、兄である雄馬はその事実を認識している。

(妹と「おそろい」にするために、俺を赤ちゃん扱いするなんてあべこべだよ……)

そう思う雄馬だが、浪人生の身としてはあまり強く逆らうことができない。今からサクランボ柄のロンパースを着せられることを考えて、胸が締め付けられるほどの恥ずかしさに悶えていると――

「じゃあ雄馬には、あたしが着せてあげる」

はきはきした声で、今まで雄馬のそばでやりとりを見ていた少女が言った。

眠たげな二重瞼に赤いセルフフレームの眼鏡をかけ、上を向いた鼻と妙に厚ぼったい唇が特徴的な少女だ。にやりと笑ったその口元に、まるで吸血鬼のような八重歯が覗く。髪はざんばらなボブカットで、前髪をひと房、ピンで後ろ側に留めて、秀でた額を出していた。

身長は比較的低い、一四〇センチ半ばといったところ。着ているのはサックス系のシャツに、紺のミニスカートとパーカー。まるで高校生の制服のようだったが、雄馬と同じ年の、専門学校一年生だった。表情と髪型、服装のせいで、年齢以上に少女めいて見える。

一条璃那。

母親同士が知り合いの上、ご近所さんで、生まれてから高校を卒業するまでずっと同じクラスだったという、ほとんど腐れ縁のような幼馴染である。

そして今は、雄馬の母親とともに彼を妹と「おそろい」にしている共犯者であった。

もともと朝倉家に入り浸っている彼女であったが、雄馬の「おそろい生活」が始まって以来、雄馬が使っていた部屋に寝泊まりして、雄馬のお世話を務めていた。ちなみに少し前まではネクタイもしていたのだが、「雄馬のお世話をするとき邪魔になる」という理由で、いまは外していた。

お世話だけではない。雄馬が身に着けているベビー服や小物類も、ほとんどが彼女の作品だった。いま彼女が手に持っているエプロンドレス風ロンパースも、その一つである。

「ふふっ、ありがとうね、璃那ちゃん。じゃあこれ、ユマお兄ちゃんにお願いできる？」

「はい、お母様。雄馬のためですもの、お任せください」

璃那は舌なめずりせんばかりの表情で言い、母親の手からロンパースを受け取ると、おびえて立ちすくむ雄馬に向き直った。

「んー、雄馬、今日も可愛いわね。そのおむつカバーもエマちゃんとお揃いで、とーっても良く似合ってるわよ」

「り、璃那……」

雄馬は真っ赤になって、璃那から視線を逸らすようにうつむいた。

一八歳の少年が、同年代の異性から「可愛い」と言われて素直に喜べるわけがない。ましてや、赤ちゃん同然のおむつカバーを付けた姿を褒められても、情けないだけである。

しかし、

「どうしたの、雄馬？ 可愛いって言われたら、なんて答えればいいか、忘れちゃったのかしら？」

母親は容赦なく、高卒の息子に「絵麻の模範となるべき赤ちゃん」としての振る舞いを要求する。

隣では、妹がくりくりとした目でじっとこちらを見つめていて――

「う……あ、ありがとう、璃那、お姉ちゃん……」

雄馬は璃那を見上げて、震える声で答えた。同じ年の幼馴染に「お姉ちゃん」と呼びかけなければならぬ恥ずかしさに、おむつに包まれたお尻をくねらせた。

逆に璃那は、幼馴染の男子をベビーガール扱いすることに何ら抵抗はないようだった。そればかりか、恥辱に震えながら赤ちゃんのようにふるまっている様子に奇妙な愉悅をおぼえているらしく、

「んっふふ、褒められたらちゃんとお礼が言えるなんて、ユマちゃんは偉いわねえ」

そう言いながら彼の頭を優しく撫でて、

「いいこ、いいこ」

「んっ……」

完全に赤ちゃん扱いで、頭を撫でられる恥ずかしさ。

しかし同時に、奇妙な安らぎと幸福感をおぼえることも事実で、余計に背筋がむずむずする。

それすらも見透かしたように、璃那はくすくす笑いながら、ようやく雄馬の頭から手を放す。ロンパースのクロッチや背中についているスナップボタンを外して、その裾を大きく広げてから、

「でも、このままじゃ風邪をひいちゃうから、ロンパースを着ないとね。はい、ばんざーいって、してちょうだい」

「う……ば、ばんざーい……」

素直に上げた雄馬の両手に、ロンパースの袖が通される。

伸縮性に富んだベビーニットの生地は鳥肌が立つほどに心地よく、手首から前腕、肘を通って上腕に達して、ついに頭が裾の内側に潜り込んだ。

(うっ……)

少女用のベビー服を着せられるこの感覚は、いつまで経っても慣れることができない。

柔らかな生地が顔をこするようになって頭から首、胸元、そして下腹部へと降りてゆき、ようやくすっぽりと頭が出たころには、水色のロンパースによって上半身が覆われ、首元に白い襟が大きく広がっていた。

「んー、やつぱりユマちゃんには、このロンパースがよく似合ってるわね。サクランボ柄、すごくぴったり」

「う……」

「エマちゃんがサクラのお花で、ユマちゃんがサクランボ。ちょうど兄妹でぴったりだね。

サクラの花が大きくなって、サクランボになるんだもの。んっふふ、お母様のセンスには脱帽だわ」

璃那はなぶるように言いながら、雄馬の袖口や、襟を整える。

(しらじらしいことを……)

それを聞いた雄馬の顔が、また屈辱に歪む。

単に、少女が身に着けるような可愛い柄のロンパースを着せられるというだけではない。

「サクランボ」には、特に十代の少年にとっては極めてセンシティブな意味がある。

「チェリー」——すなわち、童貞。

齢一八にして、いまだに女子との性交渉を経験したことのない雄馬にとっては、そのサクランボ柄の服を着せられているのは、まるで「自分は童貞です」と書かれたプラカードを首から下げているようなものであった。

(おむつカバーやロンパースってだけでも恥ずかしくて死にそうなのに……よりもよつて、サクランボ柄だなんて……！)

(璃那のやつも、ぜったい判った上でからかってるだろ……)

目の前でにやにや笑う璃那を憎々しげに睨みつけるが、それすらも彼女を喜ばせるだけである。

(うう、今すぐに部屋に逃げ込んで、服を脱いじやいたい……！)

しかしその自分の部屋すらも、いまは璃那用の客室として利用されているため、入ることができない。中が元通りになっているのかさえ、怪しいものだ。

いまの彼に与えられた空間は、妹と一緒にこのベビールームだけだった。

部屋の中央にはベビーベッドが二台置かれている、と冒頭で述べたが、そのうち片方は、幅も奥行きも通常サイズの倍ほどもあり、大人であっても余裕で寝転がれるほど。こちらが、雄馬用のベビーベッドだった。

もちろんこれも国内で市販しているものではなく、アメリカにいる父親が、わざわざアドルトベビー専門店に注文し、送ってきたものだった。

(母さんに協力して、一人にもなった息子を赤ちゃん扱いするなんて……父さんも一体、何を考えてるんだよ……)

この場にはない父親を恨みながらも、自らを辱めるようなその服を着せられるに任せることしかできず、

「ほーら、ユマちゃん。お股のスナップも留めてあげるから、たっちしてごらん」

「は、はい……」

ただ璃那の言う通り「いいこ」に立ち上がり、その手がロンパースの裾を引っ張り、水色のおむつカバーを隠すようにしてクロッチについているスナップボタンを留めてゆくのを、見ることもできない。

「後ろ側も整えてあげるから、お尻を出してちょうだい」

「はい……」

璃那に背を向けると、襟足のスナップボタンを留められ、つづいてお尻のフリルも整えられる。

フリルが一枚一枚、ピンと引っ張られるたびに、背筋をぞくぞくと戦慄が走り抜け、お尻についているそのひらひらを意識してしまう。女兒服ですらあり得ない、はいはいしたり抱っこされたりするときに見られることを前提とした存在を。

「はあっ……」

恥ずかしさのあまり止めていた息を、大きく吐き出したところで、

「これでよし、と。雄馬、こつちを向いてちょうだい」

「う……うん……」

再び振り返り、幼馴染と向かい合う。そして着せてもらった後は、

「き、着せてくれてありがとう、璃那お姉ちゃん……」

妹の模範となるべく、きちんと「お礼」を言わなければならない。

真っ赤になる雄馬に、璃那は八重歯を見せて笑う。

「んふふー、どういたしまして」

「……………」

すぐ横で、「おそろい」のロンパースを着せられている兄をじっと見上げる絵麻。

そんな彼女を、母親が再び説得する。

「ほら、お兄ちゃんはちゃんと着て、可愛くなったわよ。さ、次はエマちゃんの番ね」
「うー……うん……」

騙されたような気分なのだろう、絵麻は首をかしげながらも、それでも今度は大人しく、先ほどの雄馬同様にロンパースを着せられる。

「はい、できた。ふふっ、エマちゃんも、お兄ちゃんに負けなくらい可愛いわよ」

「えへへ、ありがとう、ママ！」

「お兄ちゃん」の真似をしてお札をいう絵麻。

それが妹のためだと判っていないながらも、まるで自分の写し鏡を見せられているような恥ずかしさに、雄馬はまた泣きそうになる。

璃那はくすくす笑って、

「じゃあこっちは、エプロンもつけちゃいましょうねえー」

そう言いながら、セットのふりふりエプロンを手に取った。

胸に当たる部分の裏側が雄馬に向けられ、肩紐が大きく広げられる。

「はい、ここに腕を通してちょうだい」

「んっ……は、はい……」

エプロンの肩紐に袖を通すと、体の前にエプロンが宛がわれる。

「はい、よくできましたあ。お尻のリボンを結んであげるから、背中を向いてね」

「は、はい……」

「んー、いいこね。えーっと、後ろのボタンを留めて、お尻の上でリボンを結んで……」

ウエストがきゅっと締め付けられると同時に、後ろ側の状態を説明されると、せっかく見えないでいるところを想像してまた恥ずかしくなってしまう。

「これでよし、と。エプロンの間からお尻のふりふりが覗いて、すっごく可愛いわよ」

「う……あ、ありがとう、璃那お姉ちゃん……」

雄馬が真っ赤になってうつむくと、自分の服装が視界に映る。

エプロンをつけると、比較的シンプルなロンパースが、沢山のフリルに縁どられた華やかなものへと一変する。

あくまでエプロンドレス「風」のため、エプロンの丈は普通のエプロンドレスよりずっと短く、ロンパースの股に並んだスナップボタンが見えていた。むろん、太腿も、付け根がころろと隠れる程度で、ほとんど丸出しのままだ。

(いや……いやっ……!)

恥ずかしさに、雄馬自身のサクランボも激しく疼く。

隣ではちようど、絵麻のほうもエプロンをつけ終えたところだった。「お兄ちゃんだからサクラの花が大きくなったサクランボ」という説明だったが、むしろサクラの花をモチーフにしている絵麻のエプロンドレスのほうが、まだしもお姉さんっぽく見えてしまう。



「ふふっ、二人ともよく似合ってるわ。『おそろい』で作った甲斐があるわね」

「ほんとですね！ お兄ちゃんのユマちゃんが水色で、妹のエマちゃんがピンク。ユマちゃんがサクラランボで、エマちゃんがサクラの花。んっふふ、ちょうど兄妹で対になって素敵です！」

褒め言葉も、雄馬にとってはただの嘲弄でしかない。それでも、

「あ、ありがとう、ママ、璃那お姉ちゃん……」

「あいごとー、ママ、おねーちゃん！」

妹と一緒にお礼を言わなければならないのが、さらなる辱めとなる。

そして、さらに――

「さ、せっかくこんなに可愛くなったんだから、お散歩に出かけないとね」

母親の言葉に、今まで以上の辱めが待っていることを知る。

「あんよに靴下を履いて、お靴を履いて、近くの公園までお散歩しましょう。ご近所さんや、仲のいいお友達がいっぱい待ってるわよ」

「えー」

またもいやいやを始めそうになる絵麻。しかし、

「ほら、お兄ちゃんも一緒なんだから、いいでしょ？ ね？」

「うー……おにーたんが、いっちょなら、いく」

母親にすぐに丸め込まれるのは、まだまだ少女といったところだ。

もつとも、ダシにされる雄馬はたまったものではなく――

(やっぱり俺も、この格好で、外へ――)

(また今日も、妹と「おそろい」のところをご近所さんに見られるんだ……!)

ご近所さん――それも主婦たちばかりではない。噂は燎原の火の如く広まって、近所に住んでいるかつての友人や同級生たちの間にも、すでに知れ渡ってしまっている。男子の友人たちは遠慮してか、顔を見せることはなく、たまにすれ違っても見てみぬふりをしてくれたが、女子は一切の遠慮なく、雄馬が連れて行かれていた公園にも顔を見せ、妹と「おそろい」の生活を送る雄馬の姿を見に来る。

「朝倉くん、可愛いー!」

「妹さんとおそろい、すっごく似合ってるよ!」

「こんなことなら、あたしたちも女装させてあげればよかったな!」

単純な揶揄と嘲笑ではなく、雄馬を「可愛がる」女子が多かったが、雄馬にとっては同じことだ。女子にちやほやされるのはまんざらでもない自分が、余計に恥ずかしく腹立たしかった。

室内から目をそらすように外を見れば、ベランダに翻るたくさんのおむつ。半分は絵麻のものだったが、

(あの大きい方は、俺のおむつなんだ……)

(あんなにいっぱい、おむつを使って……)

下半身がもここになるほど当てられているおむつは、飾りではない。一週間の間、雄馬はトイレすらも禁止され、おむつの中に排泄させられているのだ。

(おしっこだけじゃなくて、うんちまで――)

下半身が熱い泥にまみれるようなあの感覚すらも、もはや慣れてきている自分が恐ろしかった。もつとも、それで生理的な嫌悪感が減衰するものではなかったが。

(早く元の生活に戻らないと、こっちまでおかしくなりそうだ……)

羞恥に満ちた「おそろい」生活。

いちおう「今月いっぱいまで」と期限は設けられている。しかしたった一週間の間に、雄馬のメンタルはすっかり削られていた。

(早く、大人に戻りたい……!)

(今月いっぱい、今月いっぱいまでの、辛抱だから……)

自分にそう言い聞かせながら、雄馬はじつと唇をかみしめるのだった。

(試読版は以上になります。続きは製品版でお楽しみください)